

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 森春濤の香奩體詩受容と漢詩創作
——韓偓の香奩詩から森春濤の艶體詩へ

氏 名 陳 文 佳

論 文 内 容 の 要 旨

第一章 韓偓の事蹟に関する再考證

韓偓の生涯の事蹟について、未だに未明なところが多い。たとえばその字は、北宋以來何説もある。『新唐書・韓偓列傳』と晁公武の『郡齋讀書志』は「致光」と記しているが、計有功の『唐詩紀事』、陳振孫の『直齋書錄解題』は「致堯」と記載している。『四庫全書總目』の作者は『列仙傳』の記載を引用して「致堯」説は「於義爲合」と述べているが、ただ韓偓と同じ時代の吳融の詩集『唐英歌詩』のうちに「和韓致光侍郎無題三首十四韻」があるから、韓偓の字についての最古の記録として信憑性が高いと思う。そして、確かな證據がない限り、韓偓没後一番早い資料の『新唐書』と『郡齋讀書志』の記録も簡単に否定できないだろう。

また、韓偓詩特にその『香奩集』のなかの作品を十分に理解するためにはその生涯の事蹟を辨明する必要がある。本章では、韓偓の詩と従來の韓偓關聯の文獻を踏まえ、彼の及第前の事蹟、江南・隰州・并州の旅、また唐滅亡後、閩地移住後の事蹟について詳しく考證し、詩人・政治家としての韓偓の人物像は少し明白になるだろう。これもまた彼の香奩詩創作の目的や詩の深意の探究に役に立つと思う。

第二章 韓偓『香奩集』の刊行及び日本での流佈と影響

現存する『香奩集』の版本はおおよそ九種が残り、それぞれ形態の異なる一卷本・二巻本・三巻本に分けられる。三巻の『唐詩百名家全集』本、王氏麟後山房本、吳汝綸評註本、江戸萬笈堂刊本、また一卷の『全唐詩』本は同じ編年本として、所收の詩

は少し食い違いがあるが、詩の配列順ほぼ同じであるため、かつて同じ祖本があったのではないかと考えられる。

日本では現存する最も古い和刻本は、文化年間、館柳灣・卷大任同校、江戸萬笈堂刊行の『韓内翰香奩集』三巻である。また、文化八年から明治初期にかけて数多くの覆刻本が刊行されている。卷大任は跋文のなかで此本の由来にわずかに言及したが、どんな底本を使って書き寫したのか明言をしていない。現存する三巻本『香奩集』は『唐詩百名家全集』本、『中晩唐五家集』本と吳汝綸評注『韓翰林集』附本三種類があり、すべて清以降の刊本である時間から推算すれば、卷氏が『唐詩百名家全集』本と王氏麟後山房本の何れかを入手し、書寫した可能性はあるが、色々な状況から見れば、『唐詩百名家全集』本を底本として手録したのは妥当な考えだと思う。

江戸末期から明治期にかけて、森春濤一派の漢詩人らが韓偓の『香奩集』を極めて推賞し、艶體詩の創作にも力を注いだという文学現象は、和刻本『香奩集』の刊行・流佈と直接的関係があると考えられる。

第三章 韓偓の香奩詩から春濤の艶體詩へ

明治の漢詩人森春濤は韓偓の香奩詩の影響を受け、艶體詩の創作を通じて当世の漢詩壇に多大な影響をもたらした。女性の容貌や姿態、その繊細な感情、曲折な心理まで緻密に描かれることも春濤艶體詩と韓偓香奩詩の共通点である。ただ韓偓の香奩詩は女性の容姿・情緒を描寫する以外、女性の才能や人格へのぐ關心には一切触れていない。一方、森春濤の女性に対する關心は、女性の容姿・感情より、むしろその人格や文學的才能を一番重視する。生涯相次いで三人の妻を失った春濤は多数の悼亡詩を詠った。春濤の悼亡詩は相変わらず艶體の風格が強く感じられるが、妻の文學的才能への關心、人格への尊重、また感情への共鳴が詩の主題である。

東京移住後の春濤は茉莉吟社を巧みに運営して明治政府の高官を社に入れ、彼が漢詩壇に於いての主導地位を固めている。そして優美繊細・豔冶憂愁の詩風を運用し、當世の詩的審美の氣風を唱導している。春濤は晩年、遂に漢詩壇の盟主となるということは、彼の艶體詩の創作、また一世を風靡するように努めることに大いに関係があると考えられる。

第四章 森春濤の王士禎受容について

明治初期の詩壇をリードした森春濤の唱導によって清詩の大々的な流行があった。春濤以前の漢詩壇の領袖、大沼枕山が稱揚したのが陸游をはじめ、蘇・黃・范・楊な

ど宋代の詩人であったが、春濤一派の漢詩人は六百年以上の時を越えた宋人の詩よりほぼ同時代のものである清人の詩を熱心に読み、そして積極的に學んだ。そこで春濤の王士禛受容に論及しなければならない。『春濤詩鈔』卷七のうちに「秋柳四首、用王漁洋韻」、また「疊韻」四首、全部八首の次韻詩が載っている。戊午の大獄のさなかであったその時期、故郷の一宮に隠居生活を送っている春濤は初めてその作品のなかに王漁洋詩を受容した痕跡が読み取れる。王士禛の「秋柳四首」は様々な典故をちりばめながら、複雑な多義性を含ませた作品であるから、詩の本事に關して諸説紛紛として意見がまとまらない。そして春濤の次韻詩をよく吟味すると、やはり漁洋の原作と違う情趣を味わうことができる。故事がちりばめられた春濤の次韻詩は漁洋から學んだ神韻詩の詩風と春濤従來の艷體詩風があいまって新鮮な響きがある傑作だが、詩の主旨に關して、おそらく詩人の本意は故人を弔うことであろう。

また、漁洋も妻との縁に恵まれず、相次いで三人の妻を病氣で喪つて、そして亡き妻たちのために數多くの悼亡詩を作つた。漁洋の悼亡詩のなかに女性的な趣味があふれる作品が多いため、「哀豔淒惻」という評價を得ている。春濤の悼亡詩は積極的に漁洋の悼亡詩を受容し、さらに自らの艷體詩風と融合して新たな境地を拓いたと言ってもよいのだろう。

第五章 森春濤と陳碧城

明治十三年（1880）二月、森槐南が著した戯曲『補春天傳奇』一冊、また春濤の門人永坂石埭が訓譯した『補春天傍譯』一冊が刊行された。『補春天傳奇』は清の嘉慶・道光朝の詩人陳文述（號碧城）が明末の才女馮小青を哀悼し、その墓道を修繕したという逸話を踏まえた上で創作した物語である。主人公の陳碧城は清朝の一流詩人ではないため、中國ではあまり注目されていないが、日本では、文久元年（1861）櫻井成憲が抄録した『陳碧城絕句』二卷、明治十年（1877）森春濤が編集した『陳碧城絕句』一卷、明治十一年（1878）春濤が出版した『清廿四家詩』の卷下に収められる「陳碧城詩」、また明治十二年（1879）市村水香が編集した『頤道堂詩鈔』四卷など、續々と出版された。

槐南はその「補春天傳奇」のなかで「情種」という概念を運用して、陳碧城の溫柔多情の人物像を描き出した。陳碧城は世間の非難を顧みず、女弟子を廣く納め、數多くの香奩體詩を詠つた。また杭州西湖の孤山で前代の才女馮小青・楊雲友・菊香三人の墓を建て、墓誌を撰し、詩文集『蘭因集』を編集した。春濤は陳碧城の人格に傾倒し、「情種」の概念を受け入れ、自らを「情天教主」と稱した。また、春濤は陳碧城の香奩詩に大變興味を持ち、陳氏『頤道堂外集』のなかの香奩詩に次韻した作品もあ

り、『陳碧城香奩詩』三冊を編集したこともある。そして、碧城香奩詩の詩語を吸収して自分の艶體詩に取り入れている。春濤は單なる陳碧城香奩詩の詩風を愛好するだけでなく、碧城詩のなかの女性の人格・才能への關心は、春濤の最も賛同するところだろう。また『槐南集』卷三「讀陳雲伯『頤道堂集』」の題記によると、春濤が『頤道堂外集』を購入したのは明治五年冬のことだとわかる。ただ色々な状況から見ると、それより前に春濤はすでに陳碧城の作品に接觸した可能性が高いと考えられる。

第六章 森春濤と『新文詩』シリーズ

明治四年春、京都で出版した『明治三十八家絶句』のなかに掲載する春濤詩の数は同輩詩人小野湖山・大沼枕山らに超え、一位となった。春濤は當時の漢詩壇において、その實力と聲望はすでに世人に認められている。恐らくこれがきっかけで春濤は毅然として一家を擧げて新都東京に移住しただろう。東京移住後の春濤は、茉莉吟社を起こし、當世漢詩人の選集『舊雨詩鈔』や『東京才人絶句』を編集し、清朝詩人陳碧城・郭頻伽らの作品を積極的に明治の漢詩壇に紹介した。また、春濤入京後の文學活動として最も注目すべきなのは漢詩文雜誌『新文詩』シリーズの編集だと思う。明治八年（1875）十一月『新文詩』第一集の出版から明治十九年（1886）十月『新新文詩』の停刊まで、春濤は詩人としてその最も大切な十一年餘の歳月を『新文詩』シリーズの編集と出版に捧げた。そして春濤・槐南父子の努力で『新文詩』シリーズはついに明治初期の最も影響力の大きい漢詩文雜誌になった。

『新文詩』に掲載する漢詩はおおよそ交遊酬唱詩・時事詩及び詠史詩・艶體詩の三種類に分けられる。春濤は巧に茉莉吟社を運営して、頻繁な詩歌集會を通じて江湖派と台閣派詩人の交流を實現した。また、春濤は明治維新の新時代に期待を寄せ、當時の内政や外交の事件に關心を持ち、『新文詩』に數多くの時事詩、また歴史に借りて時事を風刺する詠史詩を掲載し、尊王攘夷の政治思想を示している。そして春濤が最も力を入れたのは艶體詩の創作である。明治十三年（1880）三月、春濤は「詩魔自詠」十二首を詠い、堂堂と「永劫不磨脂粉氣、詩魔賴得竝文妖」と宣言している。たとえ世間に非難されても決して艶體詩の創作を諦めないという春濤の決意を示している。

春濤の漢詩創作と『新文詩』シリーズの編集は明治初期の漢詩壇に大きな影響をもたらした。そして春濤は漢詩人としての名聲が上がり、ついに明治初期の漢詩壇の盟主になった。また、彼は東京で茉莉巷賣詩店を經營し、茉莉社同人の詩文集を發行・販賣している。本章の最後では春濤のこれらの文學・社會活動の動機について少し考察を加えてみる。